離島に吹くあたらしい風

平岡昭利 編

海青社

The Winds of Change in the Remote Islands in Japan

Edited by Hiraoka, A.

海青社

離島に吹くあたらしい風

平岡昭利 編

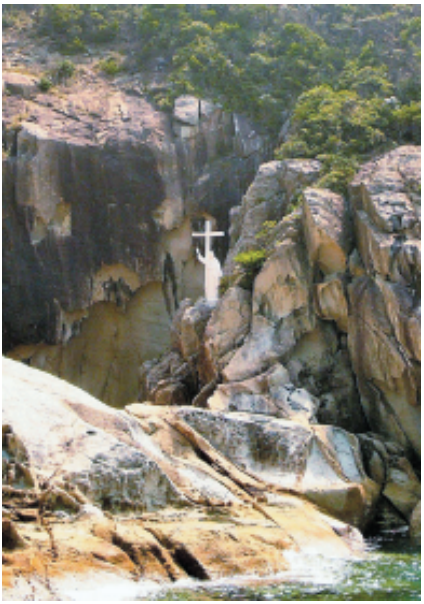
石垣島浦底湾（大田海岸）（石垣市役所提供）

海青社

集落と段々畑の景観が美しい「青海（おうみ）の里」— 対馬市峰町青海

太古地質時代の水流の化石「網代（あじろ）の漣痕（れんこん）・洗濯岩」— 対馬市上対馬町網代

信徒が切り出した石を積み上げて建てられた頭ヶ島教会
— 新上五島町友住郷頭ケ島



カクレキリシタンの殉難の地（キリシタン洞窟）— 新上五島町土井ノ浦

旧五輪教会でのガイドを受ける訪問者 — 五島市蕨町（久賀島）

南上空から見た粟島（あわしま）（右に内浦集落、左に釜谷集落）（粟島浦村役場提供）

釜谷集落の生活道路

内浦集落の生活道路

勝本港と浦集落 ― 壱岐（いき）市勝本（壱岐市役所提供）

青島集落と漁港 ― 松浦市青島

根島・串山の磯遊び ― 壱岐市勝本（壱岐市役所提供）

青島港での釣り体験 ― 松浦市青島

星砂海岸 ― 西表（いりおもて）島住吉集落（廣瀬　孝提供）

浦内川でのカヌー体験 ― 西表島浦内集落（廣瀬　孝提供）

蓋井島（ふたおいじま）の港と集落 ― 下関市蓋井島

エミュー牧場の成鳥 ― 下関市蓋井島

吉原集落のメインストリート ― 石垣島北岸

モダンな住宅が建ち並ぶ山原（やまばれ）集落 ― 石垣島北岸

はじめに

今日、離島地域は高齢化率も高く、その比率が50％を超える老人の島も珍しくない。すでに超高齢化社会が出現している。しかも、流出可能な人口は出尽くしている島々も多く、このため島社会を取り巻く生活環境は、一層、厳しさを増し、まさに負の風が吹き荒れている。

このような逆風のなか、数は少ないが、人口減少の見られない島やＩターンなどの移住によって人口が増加に転じた島もある。また、新たなツーリズムによって活性化を図る島や、全く異業種の分野へチャレンジを試みる島など、新しい風が吹いている島々もある。

本書では、このような離島に吹く新しい風にスポットを当てる。まず、その１つは、ツーリズムの変化に関するものである。従来、余り注目されることの少なかった離島の自然や歴史、文化、生活などを逆手にとって、それをむしろ都市生活にない島の魅力であるとして、観光客を呼び込もうとする試みの風である。

離島が大都市から遠く離れていることは、逆に国境に近い周辺の島々ということでもあり、この外国に近い地理的有利性から、助重は「Ⅰ．インバウンド観光に揺れる「国境の島」―対馬（つしま）」で、韓国人観光客の急増やその問題点を明らかにし、続いて松井は「Ⅱ．キリシタン・ツーリズムが展開する島々―五島列島（ごとうれっとう）」で、離島の中に脈々と引き継がれてきた静寂な宗教空間、それに関わる教会などの遺産を核とした宗教文化の観光資源化について論じている。

また、「Ⅲ．グリーン・ツーリズムの導入を模索する島―粟島（あわしま）」の山田や、「Ⅳ．ブルー・ツーリズムの定着を図る島々―壱岐島（いきのしま）・青島（あおしま）」の中村は、島という生活空間をなるべく改変することなく、できれば、ありのままの姿で観光に結びつけようとする滞在、体験型の試みに注目してい

る。山田は粟島を例として、グリーン・ツーリズムの導入過程や課題を明らかにし、中村も壱岐島・青島でのブルー・ツーリズムの導入から展開への地元の対応などについて論じている。さらに宮内は「Ⅴ. エコツーリズムの展開と住民評価―西表島（いりおもてじま）」で、西表島のエコツーリズムの導入や受容を検討し、さらに地元住民が、どのように評価しているかなどを明らかにしている。

新しい風の２つ目は、離島の従来の就業とは、まったく違う異業種へのチャレンジの風である。平岡が「Ⅵ. エミュー牧場を経営する漁業の島―蓋井島（ふたおいじま）」で、漁民がどうしてオーストラリアの草原に生息するエミューを導入したのかなどの経緯について論じている。

３つ目の風は、多くの離島が人口減少や高齢化に悩むなか、人口増加の風が吹く島が存在することである。石川は「Ⅶ. Ｉターン者が急増する南国の島―石垣島（いしがきじま）」でＩターン者の急増とその実態を検討し、これらの人々が形成した移住集落の分析を行っている。

以上、本書に収録の７つの論考を紹介したが、これらの島々に吹く新しい風が、少しでも離島振興の一助となり、さらに離島に吹く新しい追い風にならん事を望むものである。

なお、本書の多くは2007年10月に熊本大学で開催された日本地理学会秋季学術大会の公開シンポジウム「離島に吹く新しい風を捉える」（離島地域研究グループ主催）の報告を、一般向けの書物に修正したものである。

刊行は、これまでの離島の書物に続き、今回も海青社にお世話になった。社長の宮内久氏と編集部の福井将人氏に心よりお礼申しあげたい。

2009年8月20日

平　岡　昭　利

離島に吹くあたらしい風

目　　次

はじめに 1

Ⅰ．インバウンド観光に揺れる「国境の島」―対馬（つしま）（長崎県）―　助重雄久　7
1．外国にもっとも近い「国境の島」 7
2．困窮する島の経済 8
3．広がる日韓交流と韓国人旅行者の増加 9
4．韓国人旅行者の受け入れに向けた取り組み 14
5．宿泊施設の受け入れ状況 ― 広がる「温度差」 16
6．求められる慣習・文化の相互理解 19
7．「国境の島」におけるインバウンド観光の可能性と課題 21

Ⅱ．キリシタン・ツーリズムが展開する島々 ―五島列島（ごとうれっとう）（長崎県）―
松井圭介　23
1．明日の世界遺産に出会う島 23
2．教会堂の魅力 26
3．観光ツアーの動き 28
4．上五島の魅力発見「ウォーク＆クルーズ」 32
5．教会めぐりをする人々 35
6．おわりに：世界遺産登録への期待と不安 37

Ⅲ．グリーン・ツーリズムの導入を模索する島 ―粟島（あわしま）（新潟県）―
山田浩久　41
1．はじめに 41
2．粟島の概観 42
3．産業構造の変化 45
4．グリーン・ツーリズムの導入 48
5．今後の方向性と課題 53
6．おわりに 55

Ⅳ．ブルー・ツーリズムの定着を図る島々 ―壱岐島（いきのしま）・青島（あおしま）（長崎県）―
中村周作　57
1．はじめに 57

2．壱岐市勝本地区の事例 59
3．松浦市青島の事例 63
4．おわりに 69

Ⅴ．エコツーリズムの展開と住民評価 ―西表島（沖縄県）―　宮内久光　71
1．エコツーリズムとは 71
2．西表島におけるエコツーリズムの導入と進展 72
3．西表島における自然体験型観光事業者の活動状況 77
4．エコツーリズムに対する住民評価 80
5．おわりに 84

Ⅵ．エミュー牧場を経営する漁業の島 ―蓋井島（山口県）―　平岡昭利　87
1．はじめに 87
2．蓋井島と漁業 87
3．新しい何かを求めて ― エミュー導入の背景と経緯 91
4．エミューとオイル 94
5．おわりに 97

Ⅶ．Ｉターン者が急増する南国の島 ―石垣島（沖縄県）―　石川雄一　98
1．はじめに ― 石垣空港に漂う新しい風 ― 98
2．Ｉターンの動向と離島 99
3．石垣島の多様なＩターン生活 102
4．おわりに ― 地域社会を再生する力となるＩターン者 ― 110

※ 撮影者や提供先の記載のない写真は、すべて各執筆者が撮影したものである。

このプレビューでは表示されない頁があります。

Ⅰ．インバウンド観光に揺れる「国境の島」

対馬（つしま）（長崎県）

1．外国にもっとも近い「国境の島」

日本の本土から離れている島々は、生活面でも経済面でもさまざまなハンデを背負ってきた。こうした島々のうちいくつかは、距離的にみても外国の方が日本の本土より近い位置にあり、古くからアジア大陸と日本とを結ぶ接点としての役割を果たしてきた。なかでも、本章でとりあげる対馬は外国にもっとも近い「国境の島」である。

対馬は九州本土と朝鮮半島の間にある。行政上は長崎県であるが、九州本土と対馬とを結ぶフェリーやジェットフォイルは福岡市の博多港からしか出ておらず、経済面では福岡市に大きく依存している。福岡市から対馬南端までの距離はおよそ 140 km であるのに対し、対馬北端

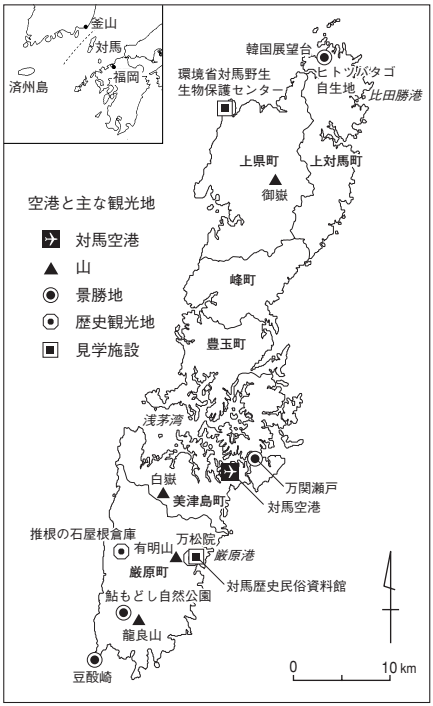


図 1-1　対馬の概略図

このプレビューでは表示されない頁があります。

Ⅱ．キリシタン・ツーリズムが展開する島々

五島列島（長崎県）

1．明日の世界遺産に出会う島

五島列島は九州の最西端、長崎県西彼杵半島の沖合約 50～100 km に浮かぶ島々である（**図 2-1**）。福江島、久賀島、奈留島、若松島、中通島の 5 つの島を五島と称し、18 の有人島と 120 余りの無人島からなる。五島列島は大きく、南西の福江島を中心とする下五島と北東の中通島を中心とする上五島に分けることができる。地形は全般に山がちで複雑であり、多くの溺れ谷が形成された沈降性の火山列島から成り立ち、リアス式海岸が発達している。

五島列島では近世期より捕鯨が盛んであり、長年にわたり島の主要産業は水産業であった。近海は好漁場として知られ、サバやアジ、イカなどの沿岸漁業やマグロの養殖業が盛んであったが、近年では漁家の高齢化も進み、島の経済に占める水産業の地位は低下している。地味はやせ、地形は急峻で平地も少ないため農業を行うための土地条件にも恵まれておらず、また島内には他に目立った産業もないため、高校を卒業すると多くの若者は島外に流出してしまう。過疎化・少子高齢化に苦しむ地域でもある。

九州本土の最西端という国土の縁辺部に位置する五島列島であるが、まさにその地理的な位置により、わが国の歴史上重要な意義を持つ島々でもあった。特に中国との交流では、わが国の最前線にあり、空海をはじめとする遣唐使は福江島から中国大陸へと困難な海路を進んだので

このプレビューでは表示されない頁があります。

Ⅲ．グリーン・ツーリズムの導入を模索する島

粟（あわ）島（しま）（新潟県）

1．はじめに

島は海に浮かぶ陸地であり、従来、船でしか行き来することができなかった。そのため、人や物が交わりあう機会が少なく、その土地の文化が現在まで引き継がれている。人々は、多くの恵みを与える半面、時として大きな災害をもたらす自然と共生し、助け合って生活してきた。彼らが培い、継承してきた文化は、まさに人間の生活の原点といえる。現代社会に生きる我々が島に魅力を感じるのは、この原点を再確認したいからであろう。

一方、本土から離れているということは、経済の発達には大きな支障となってきた。高度経済成長期以降、多くの島で過疎化が進んだのは本土と島の相対的な経済格差によるものと考えられる。また、流出した島民の多くは、働き盛りの労働者とその子供たちであったことから、近年では深刻な高齢化も問題の１つに挙げられている。これらの問題に対処していくために、島では豊かな自然を活かした観光産業に新たな活路を見出してきた。しかし、観光スタイルの変化や後継者不足のため、従来の形態を今後も維持していくことが難しくなりつつある。

他の産業とは異なり、観光産業は外部からの評価に左右されやすい。観光客の満足度は、受け入れ側がアピールする地域イメージが基準となる。観光客はイメージと現実とを比較し、イメージに合致したり、過小評価していたことを実感すると、その観光に満足する。つまり、彼らは

このプレビューでは表示されない頁があります。

Ⅳ．ブルー・ツーリズムの定着を図る島々

壱岐島（いきのしま）・青島（あおしま）（長崎県）

1．はじめに

水産庁によると、今日、漁村滞在型余暇活動、すなわちブルー・ツーリズムを標榜する地域企画は、全国に1,161件を数えることができる[1)]。件数的に多い都道府県をあげると、第1位が静岡県の82件、第2位が兵庫県の73件、第3位が岩手県の65件、以下、福岡県、北海道、東京都、長崎県、熊本県、島根県、愛媛県の順となっている。このようにブルー・ツーリズムが盛んな地域は、都市住民が足を伸ばしやすい大都市圏近接地域を取っ掛かりとして、今や臨海地域を中心に全国各地に広く展開している。

ただ、これを離島に限ってみると、**表4-1**でわかるように、全国でのブルー・ツーリズムの企画件数が196件で、企画数全体(1,161件)のわずか16.9％にすぎない。ちなみに、離島での企画が最も多い都道府県が、伊豆・小笠原諸島を抱える東京都の53件、次いで五島列島・壱岐・対馬を県域とする長崎県と隠岐諸島がある島根県の30件、さらに天草諸島のある熊本県の23件、佐渡島、粟島（あわしま）を含む新潟県の16件となっている。これをみると都市地域に近く、かつ交通の便が良く、比較的大きな離島を中心に展開している。

このような状況ではあるが、それでもグリーン・ツーリズムにだいぶん遅れて、水産庁の提唱をもとにスタートしたブルー・ツーリズムは、ようやく普及活動の時期を終え、質的な向上を目指す段階にきたと言う

このプレビューでは表示されない頁があります。

Ⅴ．エコツーリズムの展開と住民評価

西表島（沖縄県）

1．エコツーリズムとは

最近、旅行会社がエコツアーなる商品を販売して、これが大人気だという。旅行パンフレットからそのツアー内容をみてみると、カヌーを漕いだり、クジラを見たりする旅行が企画されている。エコツアーはエコツーリズムという考えや理念に基づいた旅行の形態であるが、そもそもエコツーリズムとはどのような観光の考え方なのだろうか。

真板[1)]によると、エコツーリズムという考え方は1972年にスウェーデンの首都ストックホルムで開かれた国連人間環境会議における議論と問題提起がきっかけになっているとしている。その後、1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催された地球環境サミットを受けて、「持続可能な観光（sustainable tourism）の創出が世界的課題となった。その具体性を持った1つの流れとして、特に生物多様性の保全に着目した姿がエコツーリズムであった」と述べている。

2000年代に入り、エコツーリズムという言葉も定着した感があるが、その定義は多様であり、研究者の数だけ定義があるといった状況になっている。多様な定義がある中で、各定義に共通する概念として、エコツーリズムは環境に与える影響を最小限にとどめ、持続可能性を意識した観光形態といえよう。ただし、エコツーリズムを行う目的や、環境に対する意識や責任に対する認識は、定義ごとに大きな違いが見られる。このように、エコツーリズムに対して各人がそれぞれの定義や認識を

このプレビューでは表示されない頁があります。

Ⅵ．エミュー牧場を経営する漁業の島

蓋井島（山口県）

1．はじめに

日本の多くの島々では、1960年代以降、経済の高度成長によって若者が流出し衰退した地域となり、同時に高齢化が進展し活気が失われた。その後、居住空間としての島では、質素ながら漁業や農業を中心とする営みが続けられてきたが、近年、一層の高齢化によって徐々に集落(島)での生活活動の継続が困難な状況も見られるようになった。

このようななかで、何とかして島の活気を少しでも取り戻せないかと模索し、数人の島民が、まったく異業種ともいうべき、オーストラリアの草原に生息する大型の鳥である「エミュー」を導入し、牧場を開いた小さな島がある。現在、島の人口より多い100羽を超えるエミューが飼育されている。

2．蓋井島と漁業

（1）蓋井島の概況

エミューの島として知られるようになった蓋井島は、山口県下関市に属し、響灘に浮かぶ面積2.35 km^2、周囲10.4 kmの小さな島である。大山(252 m)など急峻な山が多く、常緑広葉樹などの暖地性植物で覆われている。また、海岸の多くは急傾斜の海蝕崖によって囲まれ、集落は北西の季節風を避けるかのように島の南側のわずかな平地と傾斜地に立地

このプレビューでは表示されない頁があります。

Ⅶ．Ｉターン者が急増する南国の島

石垣島（沖縄県）

１．はじめに―石垣空港に漂う新しい風―

石垣市街の東に位置する石垣空港では、小型ジェット機がかろうじて離着陸可能な短い滑走路に、那覇からのジェット機が急停止・急発進の轟音をたてて頻繁に離着陸を繰り返す。那覇・石垣間の１日の便数は48便、さらに石垣・宮古間は5便、与那国島へは4便、福岡との間は2便、東京から到着の片道便が2便、大阪・神戸・名古屋からの片道便がそれぞれ1便、合計で64便。おそらくこれが限界の便数なのであろう。

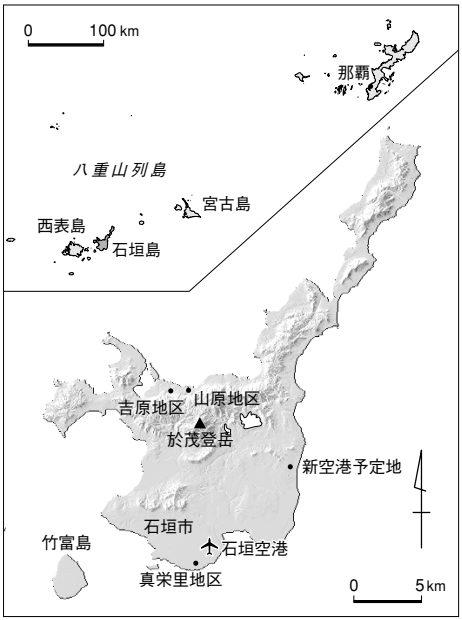


図 7-1　石垣島の位置

那覇より空路で約50分、南西に約400 km離れた日本最南西端の先島諸島、そのなかの八重山列島のなかに石垣島がある（**図 7-1**）。ほぼ石垣島1島から構成される石垣市は、合併によって2005年に宮古島市が誕

このプレビューでは表示されない頁があります。

● 編者・執筆者紹介（＊は編者）

Hiraoka Akitoshi
＊平　岡　昭　利　下関市立大学経済学部 教授
Sukeshige Takehisa
助　重　雄　久　富山国際大学現代社会学部 准教授
Matsui Keisuke
松　井　圭　介　筑波大学生命環境科学研究科 准教授
Yamada Hirohisa
山　田　浩　久　山形大学人文学部 准教授
Nakamura Shusaku
中　村　周　作　宮崎大学教育文化学部 教授
Miyauchi Hisamitsu
宮　内　久　光　琉球大学法文学部 教授
Ishikawa Yuichi
石　川　雄　一　長崎県立大学経済学部 教授

英文タイトル
The Winds of Change in the Remote Islands in Japan

りとうにふくあたらしいかぜ
離島に吹くあたらしい風

発行日 ―――― 2009年 9 月10日　初版第1刷
定　価 ―――― カバーに表示してあります
編　者 ―――― 平　岡　昭　利 ©
発行者 ―――― 宮　内　　久

海青社
Kaiseisha Press
〒520-0112　大津市日吉台 2 丁目 16-4
Tel.（077）577-2677　Fax.（077）577-2688
http://www.kaiseisha-press.ne.jp
郵便振替　01090-1-17991

● Copyright © 2009　A. Hiraoka ● ISBN978-4-86099-240-8 C0025
● 乱丁落丁はお取り替えいたします　● Printed in JAPAN

ISBN978-4-86099-957-5（PDF）